



飛行機から撮影された台風21号の目の中（21日、
沖繩の南の海上） 名古屋大・坪木教授提供

名古屋大など 飛行機で観測

今月、日本列島を通過した台風21号に、名古屋大と琉球大などのグループが飛行機で近づき、目の様子撮影、気圧などのデータ収集に成功した。このような強い台風を日本の飛行機で直接観測したのは初めてという。

観測に当たった名古屋大の坪木和久教授（気象学）によると、観測は21日と22日、台風に向けて鹿児島空港を離陸。21日は午後2時半ごろ、沖繩の南の海上にあった台風21号に接近し、高度約13キロの上空で台風の雲を突き抜けて目の中に入った。22日は台風が四国の南方まで進んだところで再び突入した。

直径90キロほどあるとみられる目の中に入ると、上空に青空が広がり、海面からそびえ立つ「目の壁雲」と呼ばれる積乱雲があった。眼下には大きな白波の立つ海面ものぞいた。飛行機から「ドロップゾンデ」という観測機器を投下して計測すると、中心気圧は920〜925hPaで1959年の伊勢湾台風の上陸時よりも低かったという。

坪木教授らは計26個の機器を投下。得られた気圧や気温、湿度、風速などのデータを基に、台風の強さや進路の予測精度を高める研究を進める。

坪木教授は「地球温暖化に伴い、勢力を落とさずに日本にやってくる台風が増えていく。大規模な避難を考える場合には正確で効果的な予測が不可欠で、直接観測を重

ねて精度を高める必要がある」と話している。